

東坡

元豐六年四十八歳（二〇八三年）

雨洗東坡月色清

雨は東坡を洗うて月色清し

市人行盡野人行

市人行き尽くして野人行く

莫嫌犖确坡頭路

嫌うこと莫れ犖确坡頭の路

自愛鏗然曳杖聲

自ら愛す鏗然杖を曳くの声

【語釈】

犖确…大石の多いさま。鏗然…金属などのたてる音の形容。ここでは杖をつく音。

【通釈】雨は東坡を洗い、月の色は清らかに澄んでいる。町の人はもう通らず、田舎暮らしの私だけが通る。石ころだらけ堤の道を嫌がってはいけない。私はこつこつと杖をつく音が好きなのだ。

誰も、省みることのない荒れた東坡の道でも。蘇東坡にとってはこよなく愛着を感じる場所なのである。雨上がり月のきれいな夜。ひとり杖をつく東坡の姿が眼に浮かぶ。

南堂 五首 其の五

元豐六年四十八歳（二〇八三年五月）

掃地焚香閉閣眠

地を掃い香を焚き閣を閉ざして眠る

簟紋如水帳如煙

簟紋は水の如く帳は煙の如し

客來夢覺知何處

客来たりて夢覚め知んぬ何れの処ぞ

挂起西窓浪接天

西窓を挂起すれば浪天に接す

【語釈】閣…古くは書物を蔵する室をいった。ここは南堂の一室。簟紋…簟は竹で編んだ席。坐臥するのに敷く。紋はその模様。知何處…知くの下に疑問詞があると不知くの意になる。挂起…あげ部、挂は持ち上げる。

【通釈】床のホコリを掃除し。香を焚き、部屋を閉め切ってねむった。敷いたむしろにはさざ波のような紋があり。帳はまるで靄のよう。来客があつて。夢から覚めたとき、どこにいるのやらわからなかった。西の窓の簾をかかげて外を眺めると。長江の波ははるか天の果てまで続いていた。